

新しい授業づくりの文化を創る

第10号

令和5年1月「能力ベースの授業づくり実践講座」教材研究会

「能力ベースの授業づくり実践講座」では、教材研究会と授業研究会を1セットとして実施しています。今回、教材研究会を実施した、中学校第3学年 国語科『握手』については、令和5年度の春に授業研究会を実施します。年度をまたいでのFセットとなりますが、令和4年度から実施している本講座の学びが、途切れることなく積み上げられ、新年度のスタートから、より質の高い授業研究ができると確信しています。ぜひ、来年度の授業研究会にご参加いただきたいと思います。

授業者からの趣旨提案&協議の論点整理

授業者：山野 航輝 教諭 学校：吹田市立南千里中学校
学年：第3学年 教科：国語（教材：『握手』）

授業者の熱い思い！！

これまでの単元でも、生徒1人ひとりの問い、読みを自分なりに大切にしてきました。今回能力ベースの実践講座で学ぶ中で、必然性のある授業を実現させたい！と改めて思いました。物語を読んだ時の生徒の問いを出発点にすることで、自分の読みを伝えたくなり、表現に気持ちが込められるようになって考えています。生徒全員に国語の良さを実感してほしいです。

【WHY】なぜ『握手』を学ぶのか

『握手』が教科書に載っているから、定番教材だから学ぶ…では受け身になる。生徒自身が物語を読んだときにどう思ったかを入口にして、他者と比較しながら自分の興味を追究するようなものにする事で、必然性を生み出したい。

出会いと別れの話。なぜ、中学3年生の春に『握手』を学ぶのか…のみを教師から問いたい。他の問いは、物語から生徒が見出しにいけるようにしたい。

【WHAT】『握手』で何を学ぶのか

自分自身の読み、思考のプロセスを言語化して伝えることができるようにしたい。自分の思ったことを人に伝えるための方法を身につけることができれば、汎用性のある力になるのではない。

把握、精査・解釈の後、共有を経て、新たな指摘を元に自分の読みを変容させていく。『握手』じゃなくてもこのプロセスができるようにしたい。どうしたら説得力のある書き方ができるかを学ばせる。

【HOW】どのように『握手』を学ぶのか

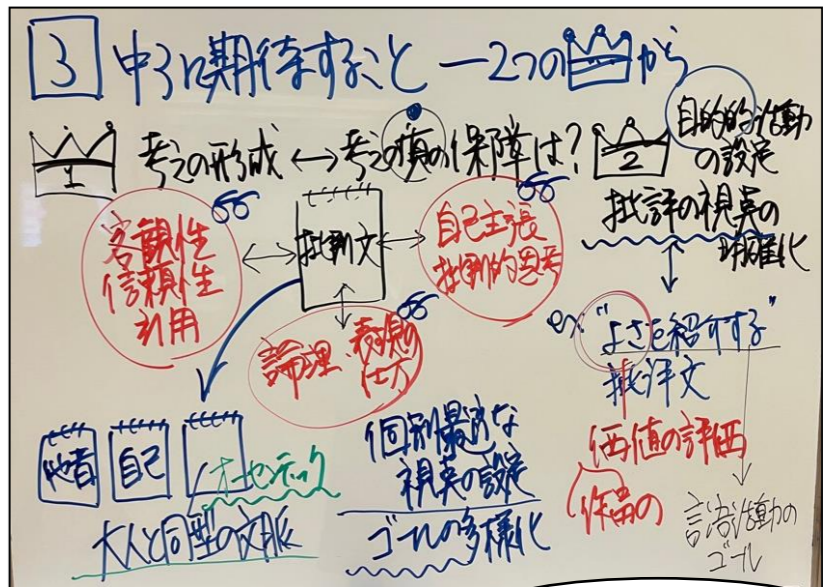
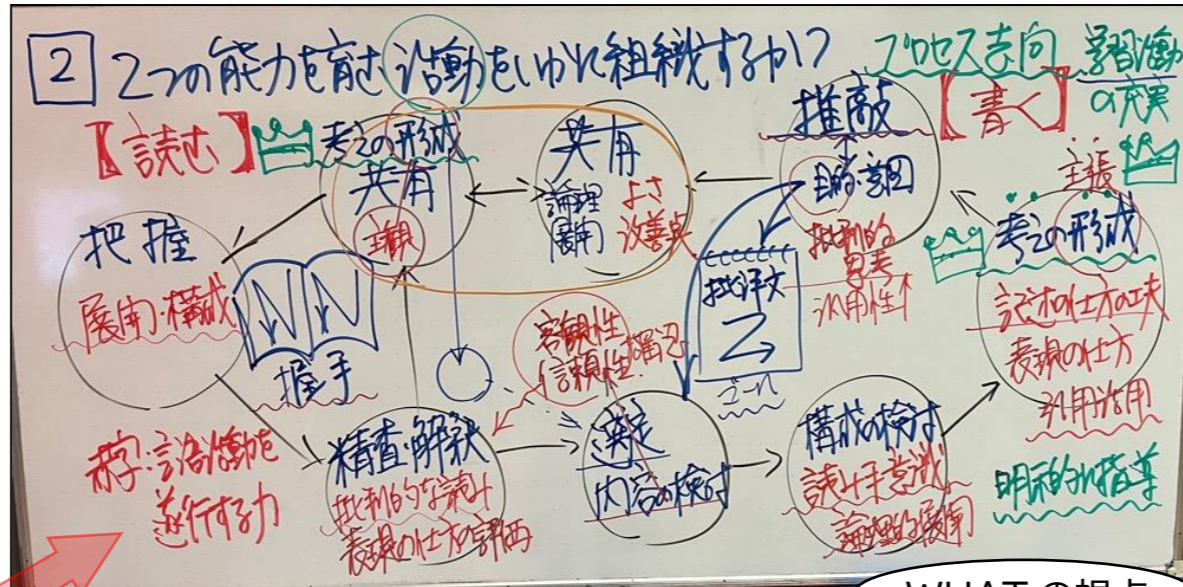
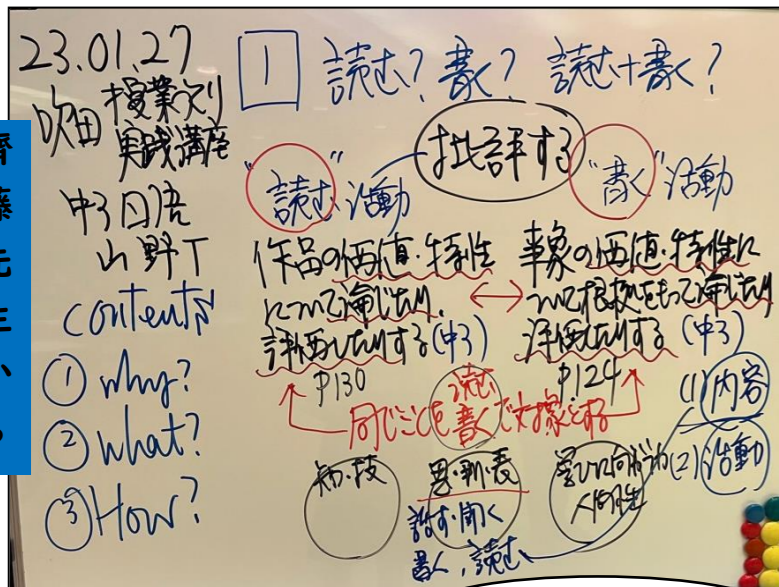
生徒自身が問いを立てることをこれまでもやってきている。本単元でも問いに対して、叙述から予想したり、作者の視点で考えたり、インターネット等で調べたり、様々な方法で問いを解決しながら読み進めると考えている。

1人1台端末を使って他者と共有する中で、自身の問いに対する解釈を再構築し、伝えたいことを説得力のある文章にできるようにしたい。

<論点>「授業者の提案する単元計画は学習指導要領の趣旨を実現するものか。」

※ 授業者は「書く」資質・能力を育む単元であると提案。しかし、単元のプロセスは「読む」プロセスではないか？・・・受講者からの疑問が共有され、齊藤先生のお話へ！！

齊藤先生から



WHYの視点

読む？書く？読む+書く？

それぞれの「読む」とか「書く」というところが目指している力は変わらない。つまり「読む」か「書く」かではなく、両方から示されている資質・能力を育てると考えたらい。

国語は、言語活動を遂行できる力を資質・能力としている。例えば、批評文を書くという一連の言語活動を遂行していくときには、読む、書く、適切な言葉が使える、よりわかりやすい表現ができる…といった学習指導要領の内容とつながっている。

WHATの視点

2つの能力を育む活動をいかに組織するか？

【このプロセスをその子なりに一生懸命回すことが非常に大事！】

上記ホワイトボードの左側の3つが読みのプロセス。①読むのスタートは構造や内容の把握。②把握したものを精査・解釈をする。ここで重要なのが、批判的な読みと、表現の仕方の評価。③考えの形成と共有。この考えの形成が、学習指導要領で、非常に重視されている。考えの形成をしていく中で、自分はこう考えるんだけど…というところから、批評文の作成が始まる。

右側の5つが書くのプロセス。①書くのスタートは題材の選定。自分なりの考えと内容の検討。客観性、信頼性が大事のため、精査・解釈の営みがとても重要となる。②構成の検討。読み手を意識することが大事。③自らの考えの形成。主張がうまく伝わるように記述、表現の仕方の工夫。④書くならではの推敲。批判的思考で問い直す。⑤そして、共有。一方で読むの共有でもあるといえる。

HOWの視点

中学3年生に期待すること

社会に出た大人と同型の文脈で学ぶ、オーセンティックな学びの経験をさせたい。しかし、国語が大好きな子から、A4の半分を書くのも厳しい子まで、いろいろな子供がいる。ここで重要なのは、個別最適な学び。最後のゴールの設定を多様化することが大切である。それと同時に、批評の視点を明確化することも重要。つまり、学習活動を目的的活動にする。1人ひとりにわかりやすく、ゴールがはっきりするような目標設定を単元の入口のところで生徒と一緒に作り上げていくことが大事。

【受講者の声】

- ・「読む」と「書く」の捉え方、言語活動についての考え方など、詳しく知ることができ、学びの多い講座でした。まだまだプロセス志向の考えが、なかなか実現できていないことも実感しました。(O先生)
- ・中学3年生の内容でしたが、小学校段階においても大切に指導していかなければならないことであり、それが系統だてて育っていくことだと感じました。(T先生)
- ・グループで議論していたことを、齊藤先生に話していただいて、モヤモヤがすっきりしました。(K先生)

【編集後記】

教材研究会で学んだことを、授業者はしっかりと受け止め、春の授業に向けて一生懸命単元を創りなおし、子供のどんな資質・能力を育成するのか、焦点化できるように頑張っています。それとともに、年間でどう育てていくかも重要な視点です。年間指導計画の作成にあたって、育てたい資質・能力のバランスを意識することが大切だと感じています。さて、いよいよ能力ベースの授業づくり実践講座も、2年目に入ります。今年度の学びが次年度の学びにつながるように、見直しを持ちながら、今後も試行錯誤を続けたいと思っています。(文責：教育センター 川添)

新しい授業づくりの文化を創る

学び続ける教師の軌跡